

1．対象哺乳類の生態等

このマニュアルでは、近年、生息地や被害の拡大が懸念される外来の中型哺乳類であるヌートリア、アライグマ及びハクビシンを対象としますが、これらの動物が地域に定着した経緯や生態は異なっており、その移入の経緯、生態等を次に示します。

1-1 ヌートリア (Myocastor coypus)



ヌートリア 写真提供：長久手猟友会

国内(県内)への移入及び定着の経緯

本種は、南アメリカ原産種ですが、明治 38 年(1905 年)に上野動物園へ初めて輸入され、昭和 14 年(1939 年)～昭和 24 年(1949 年)まで軍服用などの毛皮獣として、各地で盛んに養殖されました。しかし、終戦とともに需要が減少し、養殖場は相次いで閉鎖されて、その当時養殖されていたものが野外に放逐され、主に西日本に定着しました。

県内では、昭和 27 年(1952 年)から昭和 34 年(1959 年)まで、毛皮採取を目的として愛知県ヌートリア農業協同組合が設置されていました。昭和 38 年(1963 年)に狩猟鳥獣に指定され、昭和 49 年度(1974 年度)の

狩猟統計に初めての捕獲記録があります。古くは木曽川や矢作川河口付近でみられたものが、現在は尾張地方平野部全域を中心に分布を拡大しています。

形態的特徴

頭胴長及び体重は、50～70cm、6～9kg 程度、毛色は灰褐色です。

大きなドブネズミのような体つきで、眼や耳は小さく、尾は扁平でなく円筒状です。後足は前足より長く水かきがあり、前・後足ともに鋭い爪があります。



後足の水かきと鋭い爪

生態及び生息環境

本来は夜行性ですが、昼間でも餌を食べているところがよく観察されます。食性は、主に水辺の植物の葉、茎、地下茎等を食べます。池沼や河川の中・下流域の流れが緩やかな場所の周辺に巣穴を作って繁殖します。

なお、天敵は知られていません。

繁殖及び行動特性

特定の繁殖期はありません。年に 2～3 回出

産し、産仔数は 1 回あたり 2～6 頭、繁殖力は旺盛です。妊娠期間は約 130 日、仔は生後 6～7 ヶ月で成熟します。

また、主に水際を移動し、陸地を通って別の水辺に移動することはなく、水辺から約 5～10m 移動する程度で、水辺を離れての行動範囲はあまり広くないといわれています。

なお、5 分程度の潜水が可能であり、生後 6 ヶ月程度は、母子で行動をともにするといわれています。

1-2 アライグマ (*Procyon lotor*)



アライグマ 写真提供：名古屋市東山動物園

都道府県で生息情報があるといわれています。

県内では、飼育個体の逃亡後、犬山市内で目撃情報がありましたが、一時途絶えていました。しかし、現在は、尾張地方の丘陵地全域を中心に分布を拡大しています。平成 6 年度(1994 年度)に狩猟鳥獣に指定されています。

国内(県内)への移入及び定着の経緯

本種は、北アメリカ原産種ですが、国内における最初の移入は、昭和 37 年(1962 年)に愛知県犬山市の動物園飼育個体の逃亡(12 頭)によって発生しました。定着に際しては、人間の生活圏を積極的に利用していることが特徴ですが、民家周辺から河川沿いに様々な環境に生息地を拡大し、現在では 42

形態的特徴

頭胴長及び体重は、42～60cm、6～7kg 程度、毛色は灰色～明るい赤褐色です。尾には5～10本の黒い輪があり、灰白色の顔に両眼を覆うような黒い帯が目立ちます。タヌキやアナグマと誤認されることもありますが、尾の縞模様で区別できます。



尾の縞模様

生態及び生息環境

夜行性であり、森林や湿地帯から市街地まで多様な環境に生息しますが、一般的には水域に近い場所を好みます。近年、住宅地や林

縁部に多く生息し、住宅の屋根裏、納屋等を営巣場所として利用している例が多くみられます。食性は雑食性で、昆虫類、小動物全般から果実・野菜・穀類まで食性の幅は広いといわれています。

なお、天敵は知られていません。

繁殖及び行動特性

出産期は春、産仔数は普通3～4頭ですが、流産や出産初期に仔が死亡した場合は、再度出産することもあります。妊娠期間は約2ヶ月、仔は生後1～2年で成熟します。幼獣時は、人間になつてかわいいですが、成獣になると気が荒く凶暴になります。

また、春～秋にかけては、当歳仔が雌(母親)とともに行動するといわれています。

なお、県内のテレメトリー調査(4～6月)事例では、雄の行動域は約200ha、雌の行動域は約20～30haとなっていた結果があります。

1-3 ハクビシン (Paguma larvata)



ハクビシン

写真提供：名古屋市東山動物園

国内(県内)への移入及び定着の経緯

本種は、東南アジアを中心に生息しますが、原産地は不明です。なお、九州に生息していないという文献が多く、江戸時代に持ち込まれた記録がありますが、侵入経緯の詳細は不明です。

第二次世界大戦中には毛皮用の養殖タヌキとともに飼育されていましたが、毛皮の質が

悪いため放逐され、戦後になって個体数が増えたといわれています。

県内での記録は、昭和 29 年(1954 年)秋に東栄町の大入溪谷で捕獲されたものが最初です。その後、昭和 40 年(1965 年)代に設楽町、昭和 50 年(1975 年)頃までに新城付近、昭和 55 年(1980 年)頃には蒲郡付近と生息域を広げ、その後もさらに分布を拡大しています。平成 6 年度(1994 年度)に狩猟鳥獣に指定されています。

形態的特徴

頭胴長及び体重は、61～66cm、3 kg 程度、毛色は灰褐色です。四肢は短く、尾が長い。鼻づらは長く、眼が大きい。耳介は大きく目立ち、額から鼻にかけての白斑が特徴であり、他の哺乳類との区別は容易です。

生態及び生息環境

夜行性であり、樹上生活の得意な中型の哺乳類です。雑食性ですが、植物質は果実がほとんどで、それ以外の植物質はあまり好みません。生息域は市街地から山間地まで広がります。

なお、天敵は知られていません。

繁殖及び行動特性

出産期は 3～12 月、産仔数は 1～4 頭です。妊娠期間は約 2 ヶ月、仔は約 2 年で成熟します。

河川、沢沿い、池沼等の水辺を移動するこ

とが多く、人家周辺を行動域としている個体は、主に側溝を移動経路としているといわれています。県内では道路上での轢死体の確認も少なくありません。

なお、関東地方のテレメトリー調査(7～8 月)事例では、雄の行動範囲は約 45ha、雌は約 30ha で、各個体の行動域は重なり、完全なナワバリは持たないとされています。